

寝たきりだけど社長やっています

～19歳で社長になった重度障がい者の物語～

株式会社仙拓 代表取締役社長 佐藤仙務 彩図社

(はじめに)

2011年4月8日僕が会社を立ち上げた日だ。業務内容は主にウェブサイト制作や名刺制作だ、僕の持っている障がいは脊髄性筋萎縮症で10万人に一人の難病、僕の現在自力できる事と言えば「話す」こと、と「指先を1センチ動かす」こと、位のものだ。立ち上がる事も歩くこともできないので一日中寝たきり、そんな僕が“働く”という事の意味について語っていきたい。

第1章 寝たきり社長の日常

* 寝たきり社長の仕事道具～左手で動くのは親指が数ミリだけ右手は親指が1センチ前後動くだけ、この二つの指と会話、表情を用いて仕事することになり、特別仕様のマウスが必要になる、メールを打つ際は画面にキーボードを出し1文字ずつ入力。この特別仕様のマウスは父が僕の為に市販の物を改良してくれたものだ。父は僕の体介助について完全に母任せにしているが機械類は一生懸命作ってくれる。最近ではパソコンで使えるIP電話やスカイプを活用している。

* 仙拓の相棒 松元とは？

僕は自分でデザインするセンスに欠けているところがあり実際に制作してくれる人が必要、それが共同経営者の松元という、松元も僕と同じ病気の持ち主で、僕の3歳年上だ、お互いが対等でズバリ・ズバリと言い合う仲だ。仕事は喧嘩半分～大切な相棒だが性格が決定的に違うところがある、僕はせっかち、猪突猛進、まず行動する感じで松元は「先ず考える」「なかなか動かない」そして「マイペース」である。

* 日々の業務はどんなもの

～以前に請け負ったウェブサイトの制作は「ヒヤリングシート」でそれに従って数十項目からなる「ウェブサイトを作る目的など」イメージを作るのが必要で ウェブサイト限定のキャンペーンもやる。

～ウェブサイトの制作で重要な事はヒヤリングに沿う事は勿論の事いかにクライアントの意図やイメージをくみ取れるか、その上でクライアントにないアイデアや技術方法を提案しサイトを閲覧したユーザーがもう一度訪れたいくなるように制作していく事。

* 寝たきり社長は諸刃の刃

仙拓は立ち上げて2年目、これまでの実績はウェブサイトの制作が7件、その他名刺制作など数十件を受けている。

メリットとしては注目度が高いという事、しかしデメリットに繋がる事もあるから要注意だ。あくまでもクライアントは仕事の質で発注するのであり一般の企業以上

のサービスを提供できて初めて本当のメリットになる。

もう一つのメリットは僕たち重度障がい者はネットの事を良く知っているという事、その知識を活かしたウェブサイトの制作を行う事でクライアントから使いやすい見やすいという評価を頂くことが多い。

- * 全ては営業から始まる～高度な名刺～僕が小学校に上がるまで通っていた学校の先生から名刺を作成の仕事は予想以上に難しいものだった、先生から出され要望は「シルバーの材料を使い、その上で冷たい印象にならず温かいものにして欲しい」と、高度な要望だったがシルバーの素材を使いながら下方に赤い印刷を施し曲線を入れたデザインをすることで温かさと柔らかさを表現することが出来た。
- ～仕事もうまく流れていく～完成した名刺は先生が大変気に入っていただき、その事を取材してくれた地元のケーブルテレビが取り上げてくれ、僕たちが住んでいる愛知県知多地域のフリーペーパー「ちたまるスマイル」で頑張っている新成人企画で取り上げていただき、その中で僕たちが紹介された。

第2章 僕が会社を作るまで

- ～なぜ会社を立ち上げたか～その答えは簡単だ「ほかで働く場所がなかった」からだ僕が障がい者がハッキリしたのは幼児の時に両親は医師から「余命は5年から長くて10年でしょう」と告げられていた。この事は伏せられていて大きくなるまで聞かされていなかった、両親としては常に余命が頭にある訳でそんな僕が将来働ける訳がないと。
- ～余命は5年から10年～ある夜、僕は息が苦しくなり母にそのことを告げたら母はこわばった表情で病院に行こうと言い、名古屋市立大学病院に連れて行かれ主治医から「夜間に人工呼吸器を使ってみないか、それなら呼吸が楽になるよ」これこそが僕の命を救う提案だった(最初の医師が両親に告げた余命5年から10年を避ける為の方法は気管支切開で酸素チューブを取り入れていたら「話す」事も奪われていた)まだ医療としては初期段階でリスクはあったが僕はこれを受け入れ余命宣告を乗り越えて今でも元気に過ごしている、医療の発達に感謝するばかりだ。僕の相棒の松元もこれを使う事になった、この人工呼吸器のお陰で今の仙拓が存在していると言える。
- ～障がい者の働き場所はどこになるのか～法律によって56人以上の従業員を擁する会社は障がい者を全体の1、8%以上雇用しなければならないと義務づけられている。自分で身の回りのこと全て行う程度の軽い障がい者は事務や電話受付などの仕事を行う事が多い、但し障がいの程度は重くなるにつれ受け入れる企業も大きく減少する。例えば僕のように「話す」こと、と「指を動かす」こと位しかできない者は最重度の介護を要する「区分6」となる、僕や松元のような「区分6」のものは在宅で仕事をせずに過したり、働きたい意思のある者は「授産施設」という障がい者たちが簡単な作業を行い、賃金を得る場所に行く事になる、賃金は1ヶ月で1万円前後と言ったところでこれが“障がい者”を取り巻く就労の現実だ。
- ～“障がい者”の就活～2009年の夏、僕は高校3年生になって

目標にしていた職場の体験学習へと向かった。実習期間は数日から数週間程度で、実習の内容は基本的に実習生の人となりやコミュニケーション能力を判断する為の内容を課せられることが多い。実習先は主にコンピュータ作業を専門のウェブサイト制作やシステム開発、データ入力など多岐にわたり僕のような重度障がい者でも健常者に近い土俵で働けると魅力を感じていた、又ここでは平均工賃が10万円を上回っていることも魅力的だった。

～体験実習スタート～車を運転する母が「あんたね、毎日こんなに遠い場所まで車で送迎させる気？」と。

実習体験では施設で働いている所員一人一人にインタビューするというもので内容をレポートに纏めるのは思った以上に難しい課題だと思った。

この実習で一番求められるのはコミュニケーション能力だろう。

～「介助」というハードル～僕の場合は日常生活の動作を全て依頼する「全介護」だ。慣れていない人が僕の介護を行い・力加減を誤れば、すぐに怪我をする、しかも僕の場合怪我が完治する速度が健常者の何倍も遅いのだ。

～障がい者の工夫とは？～字は書けないがボールペン型ボイスレコーダを活用

～インタビューは人間観察～障がいを持つ所員の中には家庭を築いた人や、元々は一般企業で働いていた人、事故や病気が原因で中途から障がいを抱えていた人がいたが普段の学校生活では聞けない話を沢山聞くことが出来た。

～実習の評価は？～1週間分のインタビューをレポートに纏めて提出「何ヶ所か誤字脱字はあったがよく頑張った、秋には本実習をやってみようか」と最高の言葉だった。

～事件的な出会い～帰り支度を済ませた僕が玄関前の事務室に入り1週間のお礼の挨拶をしたら車椅子に乗った60歳位の男性が「お前夏休みも全部来い」と、突然の命令口調に頭がくらくらしたが冷静にお断りしたところ「お前は先生の言いなりか・・・どうせやる事ねえんだろう？」と、僕は怖かったが必死に答え「趣味で電動椅子サッカーやっていますので・・・」と、歯切れの悪い私に「障がい者で先生の云う通りの優等生は最悪だぞ！」僕はカチンときて「自分で判断します」とキツパリ言った。

～生き方が違う～一発触発の雰囲気の中で「お前ここから一人で帰るんだろうな？」「いえ母が迎えに来てくれます」彼は吐き出すように「親が甘やかしゃがって・・・一人で通わせろよ」僕は気持ちをぐっところえて、長時間車椅子に座ってられない事、電動車椅子を口で操作する僕は電車にも乗れない事、安心できるヘルパーがまだ見つかっていない事など分かってもらいたかったが、彼の最後の言葉が僕の心をポツきり折ってしまった「お前みたいな軟弱障がい者、ろくな人生を送れない」僕は暫く呆然としていたが「1週間ありがとうございました・・・失礼します・・・」僕を出迎えた母は本実習をやらせてもらえると、喜んでいたが「ここには行かない」と言った。

～進路と自立～僕が接してきた障がい者は大きく分けて ①なるべく健常者と同じような生き方を目指す人 ②障がい者の生き方を旨とする人

僕が気になるのは①のケースの人が②のケースの人を自分より見下す傾向がある事実習の施設で働く人は良い人が多かったがいわば①のタイプの人ばかりだった。そして積み重なる違和感が最後に僕と衝突した受付にいる人だった、そして迷いの中で進路担当の先生に「進路の件、ゼロから考えさせてください」と告げた。

- ～自立ではなく自律を～教務担任の先生から呼び出され、自分の考え方を変えないでいると「“じりつ”には二つある、自分で立つ自立と、自分を律する自律だ」障がい者の多くは自立を目指すが“自律”は自分の事は自分で律する、つまりは自分の置かれた環境や障がいという状況の中で、自分を持って生きるという事だと、迷って弱り切っていた僕に自律という言葉が凄く響いた。そして先生は最後に「これからの人生で様々な事が起こる事があって変わっていく事もあるが変わらない自分を持ち続ける事が大切なんだ、その事を覚えておいてくれたら先生はお前を応援する」と言われた。
- ～心に響く母の言葉～進路先のことは家でも話し合ったが父は僕のことは母に任せている為、特別言葉はなく、母は「あんな遠い所迄運転するのは大変だから良かった」と、或る時、先生から「仙務君はいつも頑張っていますね」と母が言われていたので、こっそり近づくと母は「うちの子はそこら辺の普通の子と一緒にですよ」と、この母の一言で胸の中の固いしこりの様なものが溶けたように感じ、自由にやりたい事をしようと。
- ～相棒とはサッカー仲間～進路が決まらない僕は悩みの中にいた、その頃、仙拓での共同経営者松元とスカイプを通じて話していた。電動車椅子サッカーを中学1年生から熱中し高校生では日本電動車椅子サッカー協会の中部チームに所属(20年程伝統のある由緒正しいチーム)し、彼とは高校を卒業後に連絡を取らなくなっていたが松元はレギュラーをしていた、それから少しずつ話をするようになった。
- ～僕と一緒に仕事しない？～実習が上手いかない、進路が決まらない、と愚痴っていたら「残念ながら、そんな場所はねえよ」と、その後も様々な言い合いを続けていたが、僕の口をついて「僕と一緒に仕事しない？」一瞬後に「別にいいけど」との返事にビックリ、「だけど、お前がやることを考えろよ」「わ、分かった」ドキドキした。
- ～俺にとっての聖地～高校の卒業式は近づいてくる「何かやれることはないのか」が俺はずーと頭を悩ませていた、松元に卒業後は何をしているのと聞いたら「愛光園に通って仲間とオリジナルTシャツを作ったりしている」「重い障害を持っていても一人一人仲間の個性や生き甲斐を尊重してくれ自分のやりたいことが発信でき俺にとっての聖地なんだ」「間違ってもお前は来んなよ」と、松元を明るい表情にさせている愛光園の事が気になり始めた。
- ～何で行きたいと思ったの？～早速担任の先生に「卒業後は愛光園に行きたい」と、「今までと違う世界を見てみたいんです」と。
- ～来んなって云っただろう～先生の付き添いで僕は愛光園に足を踏み入れた、松元は僕の存在に気付く「来んなって云っただろう」と「僕も聖地を見たかったんだ」と僕はこの時に松元がデザインをしていることを知った、

松元は学生の時から好きで勉強し技術を磨き、愛光園でもそれを発揮して自分の仕事としていた。

～新生活は愛光園と大学生活～高校卒業後は週に3日愛光園に通い、それと同時に日本福祉大学に通い始め(リハビリ関係やコンピュータ関係の講義科目等の履修生)

～失敗の名刺制作～近所に住む叔母から名刺の制作を発注依頼があり20枚500円で受注したが結果は気に入られなかった。身近な人に営業を続け10前後の依頼を受け仮デザインの際に発注者に見せ、作り直すこともあったがみんな喜んで名刺を受け取ってくれた。

～それじゃあ会社を作ろうか～僕には2人の兄がいて、二番目の兄の小学校時代の先生から「知り合いの会社の社長さんの名刺を作ってほしい」と言われ、今回は全く知らない人から、松元もいつもより少し気合が違っている感じだった、3パターンの仮デザインを作り、そのうち一つを気に入ってもらえた。

会社設立にはそれなりの資金が必要で名刺作りだけでは遠い道のりに思え「拓ちゃん名刺のデザイン以外に何が出来る」に「俺ウェブサイト制作なら出来るよ」という答えで松元は愛光園のウェブサイト制作していた(今現在公開中)「それで行こう」「僕が仕事を取ってくる」と僕が熱心に云うと松元も「分かった」

高校の先生に言われた“自律”“自分を持つ”という事はこれじゃないか、僕ははっきりと確信した、僕にとって“働く”ということは起業することだ！

～定款って何だ～会社を設立するにはどんな手順が必要なのか調べ、調べれば調べるほど不安になった、3～4ヶ月毎日何時間もかけて、情報収集していく内に手順がおぼろげながら分るようになってきた。

～大きな仕事はリニューアル～僕は20歳近く年の離れた従兄弟にメールして「お店のウェブでサイトを拝見したリニューアルする予定は？」と問いかけると「今のホームページはあまり気に入っていない、良くしてくれるなら、お願いしたい」との事、金額は10万円、松元も気合十分に「おし、任せとけ！」

～産経新聞第15回約束「プロミス」エッセー対象に応募し「佳作」に入選、5万円の賞金を頂くことが出来た、今までに稼いできたお金でなんとか会社を設立できた。

～相棒の恋～松本には2つ年下の健常者の彼女がいた、デートを重ねて本気の交際だったようだ。彼女のお父さんから「稼ぎもできないない能無し障がい者がうちの娘をどうやって幸せにするつもりだ！」とかなり酷いことを言われた、僕に松元は「悔しくてたまらない、何も言い返せなかった」と、その後も半年ほど交際を続けていたが結局、別れてしまった。

～準備期間は信用されない～弁護士や行政書士、税理士などに必要な準備の問い合わせの電話をするにも母に依頼して電話番号をプッシュしてもらい耳元に受話器を運んでもらっている、条件面などの折り合いがつかず何人にも電話、その中で僕にとって大きな出会い、それが今、仙拓の会計処理をお願いしている

後藤さんだ、メールで問合せし、年齢や障がい者の事も伝えたら誠意のある返信で「会計処理を任せて下さるなら設立に関する手続きは全部無償で代行します」と、非常にありがたい申し出だった。

～社名はどうする～僕は適当に仙務にしようと、松元が「俺はどこに行ったんだ？」とそれなら「拓仙」僕は二人の名前を取り入れるアイデアが気に入ったが「なんで俺の名前が下なの？」じゃあ「合同会社仙拓」松本が辞書で調べ「仙」は世俗にとらわれない人って意味もある、それを開拓する拓っていう字があり、新しいものを開拓していくという会社の名前になる「俺とお前にピッタリじゃないかと」と決まった。「社長は俺がやろうか」松元はそれがいいと同意。

～コンビ解散の危機～会社設立の秒読み段階で松元と約束、それは会社の業務に関する資格や検定を3つずつ取得する事だった、デザイン担当の松元にウェブサイト制作に関する資格や検定、会社運営を担当する僕は法務や経営学の検定を3種類それぞれ取得することになった、先に松元が二つの試験に合格、遅ればせながら僕も試験に望んで2連敗、松元の反応は冷たく「もし次の試験に落ちたら解散」と、冷やかに云われ、本気で取り組み3つ目の法務関係の検定はほぼ満点で合格。

第3章 これからの仙拓が目指すこと

～念願の会社設立～2011年5月中旬頃に後藤税理士さんから法務局で登記が無事受理と、合同会社仙拓がこの世に産声を上げた瞬間だった、すぐに松元にも電話した、松元は「一人前に稼げる障がい者になりたい」と、僕は「重度障がい者でも楽しく働ける会社にしたい」と「更に重度障がい者で働く場所がない人も雇用したい」と僕の言葉に松元は「そこまで考えていたの？」と驚いていたが付き合ってもいいと～周囲の反応～母は心配そうな様子で、父は「責任をもってやれよ」二人の兄は驚いた様子、母校では凄い反応で皆応援してくれると言われ仙拓は最初の一步を踏み出した。

～スタートダッシュ～1ヶ月程で名刺の制作を印刷所に依頼して刷るようになり、1ヶ月ほど経って初のウェブ再度政策の仕事が舞い込んできた、シェア合唱団のウェブサイトだった、その1～2ヶ月後に美容室からの仕事も入りまらずのスタートダッシュ。

～親への恩返し～合唱団と美容室の仕事の報酬は合わせて約20万円、俺と松元は役員報酬を1年目は1万円受け取ることにした既に5ヶ月で5万円受け取っていた。僕は母と父・兄二人の5人で鰻を食べに行くと父は凄く嬉しそうだった。

～仙拓の大きな壁～仕事は殆どにコネを使ったものだった。

～新聞社への売り込み～地域密着の中日新聞にメールして待つこと数日にして返信があり、後日記者さんの訪問を受け記事にすることを約束してくれて夕刊に掲載されたのは、できるだけ大きなスペース取り上げられるように夕刊に掲載された(2011年9月3日発行)その時仙拓の「問い合わせホーム」が初めて動いた、三重県の市議員の方だった。

～障がい者でも騙される～市議員さんからの仕事を完了させた後、仕事がぼったり取れなくなりそこで僕が思いついたのはインターネット上の仕事のマッチングサイトだった、それにより診察券のウェブサイトを制作する会社と交渉が進み 2 ヶ月後に診察券のウェブサイトを制作する会社と仕事がまとまり一息ついた、しかし仙拓は「この仕事少し怪しいんじゃないか」と、結果的に仕事は完了したが「使い物にならない」とお金を払ってもらえなかった。

～どうすればいいのか分からない～悪い流れが続いたが東海市立あすなろ学園でもお世話になった先生の名刺制作がきっかけとなってケーブルテレビや地方情報誌の取材を受けることが出来、又仕事が入ってくるようになった。

～いよいよ初決算～2012年5月の決算内容～役員報酬24万円、売上高76万円強、仕入れ高4万円強、税引前当期利益23,591円、2年目が始まっていたが売り上げは百万円を超えそうだ。今の時代は起業後1年以内に倒産する会社は30～40%と、そして5年以内に80%で10年以内になると95%が倒産すると云われている。

～仙拓が目指すものとは？～僕の夢は仙拓を障がい者が当たり前のように働ける会社にしたというものだ、インターネットはバリアフリーの世界だ、文字や言葉、写真等を通じて世界とつながる事が出来る、そこには無限大の夢が広がっている、僕はそこに一緒に乗り出していける仲間たちと働くことが出来る会社を作りたい。

～ビジネス社会はバリアフリー～「障がい者という言葉に拘らない事を前提として動けばそのことで仕事が取れ、クライアントが満足してくれればそれこそ健常者と同じ土俵で戦うことになる」このことが仙拓にとって一つの転機となった。

～緊張のスカイプ講演～インターネット回線を通じてテレビ電話の様に話すことが出来るソフトで僕はよくクライアントとの打ち合わせや、松元との会話に役立てている、大学准教授の紹介で講演会に呼ばれ「スカイプを使って話す」という依頼がきた、聴講者は養護学校の先生や保護者の方々に講演タイトルは「子供たちの可能性をはぐむ機器、道具、キャリア教育を踏まえた自立への支援・・・」二つ返事で引き受けスカイプの着信があり「応答」のボタンをクリック「先ずは簡単な仙拓の説明」から始まり仕事の内容・会社立ち上げの思いなど質問に応えた。

～相棒からのビデオレター～会社を興して数ヶ月、僕が20才の誕生日を迎えた時に愛光園に行くと僕の誕生日を祝う飾り付けがされていた、スタッフの方が祝いをくれて僕に「見てもらいたいものがあるんだ」と、スクリーンに松元からのメッセージが語りかけてくれた「20才の誕生日おめでとう、これからも佐藤仙務の誇る目標の為に起こす行動力それを実現する力は他の誰にもない才能だと思う、その武器と才能を生かし乍ら迷惑だと思うけれど俺の愚痴や文句を聞きながら相棒としてよろしく頼むよ」と最後に「これから先、何倍も稼ぐ様な会社になったら、お前からパートナーで良かったな、とお互いに言える様に頑張っていこう社長、以上不甲斐ない副社長からでした」

(おわりに)

執筆に当たり僕は「障がい者のドキュメンタリー本」としてではなくあくまで「働くということ」をテーマに今の日本にはどこか欠けている「働くことの本当の意味」を問いつける内容にしようというものです。

執筆は仙拓の業務と並行しながら行い 10 ヶ月ほど大変な日々が続きました、しかし幼少時代から自分の本を出版することが夢だったので、その作業はやり甲斐があると同時にとても楽しいものでした。

僕のような寝たきり障がい者が現在こうして働くことが出来ているのはテクノロジーの進歩と松元や学校を始め周りの協力者のおかげです。

僕の最大の夢である「重度障がい者の働ける会社」は相棒の松元となら、どんな大きな壁でも乗り越え、夢に向かって仕事して行けると信じています。

何より・働くってとても楽しいことだから。

2012年11月7日 佐藤仙務

👍仙拓と「寝たきり社長」の今

「ビジネス・イノベーション・アワード 2013 年」という日本最古の経営コンサル法人の一般社団法人日本経営学士会が主催コンテストに於いての会長特別賞を受賞。

二つ目は 2014 年 4 月から松元と共同でアパートを借り、そこで仕事を行うようになり、会社も株式会社となり、役員報酬も第 4 期では漸く 20 万円を超えた。

三つ目は念願のスタッフ雇用で 30 代後半の男性で彼も重度の障がい者で彼は僕と同じように動かせるのは指先が少しのみ家でほぼ寝たきり、その上・彼は気管支切開し常時人工呼吸器を装着し人と話すことも難しい、彼の業務内容は仙務ウェブサイトのアクセス分析、大学院で理学分野を学んだ彼にとって数字を扱うアクセス分析は正に適任、1 ヶ月働き新入社員からメールが届き「今日、初任給でケーキを食べました、美味しかったです！」と、ケーキの写真も添付され新入社員のお母さんにとっては正に“世界一美味しいケーキ”だったに違いない。

(完)